

# TECUM 研究機関誌『数理教育のロゴスとプラクシス』 投稿規程

2020/1/11 理事会決定

2021/6/12 理事会改訂

## 投稿原稿の枠＝投稿の種類

原則として、一般会員はだれでも研究機関誌『数理教育のロゴスとプラクシス』に投稿できる。しかし次の《投稿枠》を明確に意識する必要がある。

1. 数学教育の改善を視野においた《査読つき論文，論考，随想》
2. 数学教育の改善を視野においた《非査読の実践報告，随想，意見》
3. その他の機関誌委員長の要請または企画に応じた《特別寄稿》，《連載論考》，《企画記事》

論文，論考，随想の違いは，学理的な論証性，主題の専門性，視点の斬新さのどこに力点をおくかの違いであり，論文を分類する枠ではない。引用の正確さは論考の緻密さと同様期待される最小要件である。引用，参考文献の掲載方法については，最後の節にまとめる。

## 1 査読つき論文，論考，随想

機関誌『数理教育のロゴスとプラクシス』への掲載の可否を行う査読作業は，前節の第1項

数学教育の改善を視野においた論文，論考，随想

に対してのみ行う。この枠に入る諸論文全体の容量の制限はないが，査読者の負担も考えて，一応の目安として、『一論文 A4 20 ページ』を原則的な上限とする。

共著の関係や，貴重な必須資料などからこの原則が守れないときは，「別添資料は電子配布」などの形式を含め，機関誌委員長の裁定を尊重する。

査読論考は，査読に要する時間を考慮して十分早く機関誌委員長に提出する必要がある。一般に掲載不可の論考への返事は早いですが，掲載可の論考については査読にかかる時間と修正意見の反映のために掲載が遅れる可能性がある。またその関係から LaTeX source と生成された PDF の両方の提出が望ましい。

正式な査読は論文ごとに、機関誌委員会委員長が、理事長と相談の上で、査読委員長の指名を含め、査読委員会を組織して査読作業を期限附で依頼する。各査読委員会の掲載可否の結論は査読委員長を介して機関誌委員長に報告され、機関誌委員長はそれを尊重して機関誌への掲載を判断する。査読委員会の構成員の氏名は査読委員会の委員長を除き採用論文が公開された後も非公開とする。

査読つきの掲載を希望しながら「掲載不可」の判定が機関誌委員会で行った論文は、以下のいずれかの対処方法を機関誌委員長が著者に伝える。

- 論文の主たる主張を明確化するために全体を大幅に減量し、『一論文 A4 判 6 ページ以内』を上限として、第2項に分類される「非査読の実践報告、随想、意見」の枠に投稿する。
- 査読結果を受け止めて、必要な修正を行い、次号以降への査読論考枠での掲載を目指す。

以上の正式の査読の他に、少数の査読委員による簡易査読という従来の制度も維持する。

投稿が掲載に間に合った論文の著者には研究会での発表の時間も 30 ～ 60 分の範囲で割り当てられる。

## 2 非査読の実践報告、随想、意見

悪意をもって、他者の権利を侵害、名誉を毀損する意図をもったものでない限り、数学教育に関するいかなる投稿も受け付ける<sup>1</sup>。とりわけ、普段の教育実践のなかで気づいた疑問点を自分なりの視点でまとめてその解決／未解決に向かって行った改善努力の成果に対する反省的な考察や、いわゆる教室指導、受験指導で感じたちょっとした成功談や失敗談も、たとえ学理的な厳密性や普遍的妥当性を欠いていても、多くの会員、現場教育を含む教育に関心のある一般市民の関心を引き得るものであると考える。教育現場ならではのエピソードも話題となろう。

投稿が掲載に間に合った論文の著者には研究会での発表の時間も 10 ～ 30 分の範囲で割り当てられる。

最後に、ここが重要なところであるが、この非査読論考の経験の蓄積の上に、査読論文へと昇華する夢と野心を抱いていて欲しいと願っている。

## 3 特別寄稿、連載論考、企画記事

第3項に分類される論考、記事については TECUM 研究会と研究会誌の充実のために機関誌委員長の采配に委ねる。

<sup>1</sup>著者は悪意がないのにそれで名誉が毀損されたと感じる人の存在可能性は否定できないがそれは敢えて考えない。

## 4 すべての投稿の守るべき条件

投稿は、以下の形式的条件を守るものとする。

1. 原稿は、電子的にそのまま印刷できる形式（PDFをはじめ、ページ番号のない印刷用文書）。
2. ページ数は、
  - (a) 第1項《査読つき論文、論考、随想》は2ページ以上20ページ以内
  - (b) 第2項《非査読の実践報告、随想、意見》は2ページ以上6ページ以内を原則とする。
3. 主張の明確化のために冒頭の概要、いわゆる abstract は必須。検索語はある方が望ましい。
4. 判型はA4判とする。  
文字サイズは、タイトル：18 point, 本文（著者名, abstract 含む）：12 point, 章タイトル：16 point, …とし、本文においては、1行あたりの文字数は36字、1ページあたりの行数は39行を目安とする。  
すなわち、LaTeXであれば、文書クラスを

```
\documentclass[12pt,a4j]{jarticle}
```

に、タイトルは `\title{タイトル}` または `{\LARGE タイトル}` と、章タイトルは `\section{章タイトル}` として入力すれば、以上の目安と一致する。タイトルは中央または左寄せで入れ、著者名は右寄せで、タイトルの直下に入れる。abstract はそれと分かる形で入れ、LaTeX の場合は quote 環境で入れることが望ましい。

5. 他者の書籍／論考の、本文への引用は、局所的な引用にならないように十分に配慮する。典拠については次項の条件に則るだけでなく、該当ページ情報は本文につける。
6. 引用の典拠を示す参考文献は必須ではないが、つけるなら、多くの海外の大学、学会で採用されている諸形式のいずれかに則り、著者、論文名、掲載誌、ページ数情報、発行年月日、出版社など、必要な諸事項を網羅する。URL も認められる。